

半世紀前の思い出

2016/01/16 立花 健吾

はじめに

油山会 30 周年ということである。おめでたい。ここまで会が続いたのは、多くの方々のご努力、ご協力があったのことであり、感謝しなければならない。

ところで、還暦をすぎて、また山登りを始め、「油山会」にも参加させてもらった。「また」というのは、私はその創立の 20 年ほど前、ということになるが、高校入学直後生物部に入部したのがきっかけで、山登りに熱中したことがあるからである。大学時代とその後数年山に登った。しかし、それはいずれも九州の山々であった。例えば、本州のアルプスの山々に憧れてはいたものの、その登山は全く念頭になかった。以下、その頃の山登りについて、思い出すままに綴ってみる。

若杉山と三郡山系

最初の頃は昆虫、特に蝶の採集のために山へ出かけた。一人で行くことが多かった。気候のよい春から初夏、日の長いこともあって、土曜日には比較的短時間で登山口に到着若杉山に毎週のように登った。授業が終わると国鉄吉塚駅へと走り（福岡県立福岡高校から吉塚駅は近かった）、汽車に乗って篠栗へ行き、そこから登るのである。もちろん、昆虫採集の七つ道具を携えて。

「養老の滝」の少し上部、登山道から少し逸れた小さな湿地に、池というほどでもない水たまりがあった。周囲は中高木が茂り、独特の自然の雰囲気があった。そこは私が発見した、いわば秘密の蝶の園で、若杉に登る時は必ず訪れた。そこで、当時の私にとっては貴重な色々な蝶を採取できたのだが、中でも高い木の枝先の葉に留まっていた「イシガケチョウ」をほぼ完全な形体で捕獲した時は脈拍が早まり、しばらく足が震えていたように思う。

その内、山歩きそのものが面白くなり、時には捕虫網を携え、若杉から宝満山までの三郡縦走を何度も行った。篠栗駅から西鉄太宰府駅まで（20km ほどであろうか）、6~7 時間くらいで（特に下りは）駆け抜けるように縦走した。

背振山系の山々

日曜日や祝日には、少し遠出して背振山系の山々にも出かけた。その頃、住んでいた博多区の家から西新まで市電に乗り、そこからバスで椎原や石窯、曲淵などの背振山系への登山口までたどり着くには時間がかかった。それらの登山口から背振、金山、井原などによく登った。

背振山系では土・日や夏休み中、山中泊登山もしばしば試みた。グループでのテント泊登山の他、当時背振山系の溪流沿いに建てられていた炭焼き小屋をよく利用させてもらった。小屋は椎原峠下や、野河内溪谷に多く、大変助かった。小屋はカヤでこしらえてあり、広さ 2~3 畳ほど、水場はすぐそば、非常に快適であった。炭焼き小屋泊山行はほとんど単独だったが、その時用いた炊事道具はほとんど失われてしまったが、アルコールコンロ（小型で、とても便利であった）が今も手元にあり、それを見ると、遙か昔の山登りのことが懐かしく思い出される。



〔アルコールコンロ〕

久住の山々

久住の山にも生物部の仲間や友人たちとよく登った。当時は未だ「やまなみハイウェイ」は走っておらず、豊後中村まで国鉄で、そこからバスに乗り換え、終点である九重町の長者原や筋湯まで行く。そこが登山口であった。今とは違って日帰りは無理で、坊ガツルの「あせび小屋」や筋湯・小松地獄すぐ下の「九大山の家」に泊まった。

ある夏の生物部夏期遠征採集旅行（毎年恒例、生物部のイベントであった）のことが思い出される（霧島や英彦山などへも出かけたが）。その時は、「九大山の家」で1泊、翌日、まず牧ノ戸峠へ登り、今でも人気のあるルートを歩き久住山へ、そこから南登山道を下った。下りきると牧場があり、そこで飲んだ新鮮な牛乳の美味しかったことを今でも鮮烈に覚えている。

大船山登山で記憶に残っているのは、段原辺りに満開のミヤマキリシマが一面に咲きほこる景色もあるが、忘れられないのは、3年生の時の、大学受験目前の登山である。生物部の山好きたち数人で年末大船登山を行った。お馴染みの坊ガツル「あせび小屋」に2泊くらいしたと思う。元旦早朝、朝食も摂らずに登り始め、大船山頂で太陽を拝んだ。気温は低く、木々は霧氷の花を咲かせていた。その時、確か、誰かが持ってきていたウィスキーの「霧氷オン・ザ・ロック」で乾杯したような気がする。下山は長袖シャツだけで駆け降りた。汗が噴き出し、シャツに染み、坊ガツルに着いた時、染み付いた汗が凍りついて、シャツがこわばっていた。

今はないが、「あせび小屋」からちょっと離れたところに1畳足らずの小さな「露天温泉」があった。下山後、数人その温泉に飛びこんだ。極めてぬるかった。気持ちはいいものの、屋根も囲いもなく、粉雪が舞う中、余りの寒さに出るに不出られず長時間浸かっていた。しかし、いつまでも温泉を楽しんでいるわけにもいかない。低温調理の茹で蛸、もしくは脂肪分の少ない豚バラ肉のごとき（つまり、冷気に無感覚になる）

状態で温泉からあがり、震えながら小屋に駆け戻った。以来、温泉は熱めを好むようになった。懐かしい思い出である。



[1960/01/01 大船山]

祖母・傾

高校3年の夏、友人二人と祖母・傾縦走を行った。生物部活動とは別の、高校時代山行一番の思い出である。

ばかでかいキスリング、テントは綿の帆布、羽毛シュラフなどは論外で毛布の夜具、1kgほどのナタ、3kgはあるスコップ、ローソクランタン、飯盒、米、缶詰、味噌漬豚肉、人参・玉葱・ジャガイモ、水筒1個、懐中電灯などなど、装備・食料は今とはまったく異なる。背負うキスリングの重量は20kg以上あったはずである。

台風襲来の直後で橋が壊れ、神原登山口のずいぶん前から歩き始め、五合目付近でテントを張った。2泊目は尾平小屋（暗くなって到着）、3泊目は九折峠の山小屋。今振り返ると、よく縦走できたものだと思う。



[1959/08/12 五合目でのキャンプ]



[1959/08/12 祖母山山頂]



[1959/08/12 祖母山または古祖母の下り?]



[1959/08/14 九折峠の山小屋]



[1959/08/14 傾山山頂]

阿蘇山

阿蘇山は根子岳登山が印象に残っている。何度か登ったが、当時の根子岳は今ほど崩壊しておらず、クサリなどの助けで西峰や天狗岩に登ることができた。大学時代、友人と二人で阿蘇登山をしたが、これは強行軍であった。確かお盆前、列車は満員で座れなかった。国鉄「坊中駅」（現在の JR「阿蘇駅」）から登り始め、中岳、高岳を巡り、日ノ尾峠付近でテントを張った。翌日根子往復、宮地駅へ降りた。今の私にとっては、信じられないような山行行程である。

おわりに

あの頃から半世紀、今はやさしい山登りしかできない。しかし、登山は健康を保つためには格好の運動であると実感している。特に、血糖値の上昇を抑える。ここ 2 年間、仕事（ボランティア）の都合で山登りができないのだが、ヘモグロビン・エイワンシー(HbA1c)が高い。去年 1 月末～2 月はじめ、15 日間のベネズエラ・ギアナ高地旅行に参加し、ロライマ山山頂台地やグラン・サバナトレッキングなどして帰国後すぐ、病院で血液検査をすると、旅行前の 7.0 以上の値が 6.4 まで下がっていた。

その後、山登りなしの生活に戻ると、血糖値が前にも増して上昇した。今年 3 月でボランティアの仕事が軽くなるので、気を引き締めて山に登りたいと思っている。「油山会」の「やさしい」山行にも参加するつもりである。